

## 瀬原義生著 『皇帝カール五世とその時代』

(思文閣 二〇一三年)

佐藤 専次

本書は、皇帝カール五世の統治した時期において、彼の統治した国を中心に、そこで起きた出来事、思想運動を叙述したものである。この時期は宗教改革の時代に対応するが、宗教改革そのものだけでなく、とくに都市民や農民の動きを基軸に置いたところに本書の特徴がある。著者は、これまで初期中世から近世初頭のヨーロッパ史について数多くの著書・翻訳書をすでに上梓されてきたが、本書が扱う一六世紀前半のドイツについては、著者の長い研究生活の中でその出発点となった研究分野であり、それをここで取り上げたのは意義深いものがある。本書はこれまで著者が公にされた個別研究を全体的に統合して概説風に叙述したものである。

著者は前著（『ドイツ中世後期の歴史像』文理閣、二〇一一年）で「歴史研究の目的は、歴史を人間の喜び、悲しみ、怒り、悩み、欲望、希望などの複合的営為としてとらえ、そこから読み取れるかもしれない歴史的展開の傾向、あるいは法則を明らかにして、将来への指針とするところにあり」（序頁）、そのためには、細部への洞察が必要なのであると述べているが、本書もこの精神が貫かれており、登場人物へのできる限りの細部へのこだわりが読みとれる。本書は全二七章からなる大部の著作であり、以下、章の順に述べていこう。

「第一章 カール五世の皇帝登位」では、彼の両親と少年時代、スペイン国王への即位を経て皇帝選挙に勝利して神聖ローマ皇帝になるまでを個人史的に扱う。皇帝選挙においてカールは、選帝侯への莫大な賄賂を贈ったが、その元手となる資金提供者は豪商フッガー家であった。「陛下を皇帝にしたのは、ほかなら

ぬこのわたくしです」というヤコブフッガーの言葉は印象的である。ただここで終生のライバルになるフランス王フランソワ一世との皇帝選挙での賄賂合戦の記述がないのがやや残念なところである。

この時代の特徴を決定づけたルターの宗教改革の開始については「第二章 ルター、宗教改革の口火切る」。ここでは、ルターの生い立ちと九五カ条の提題の発表までの経緯が述べられている。「第三章 皇帝カールとルターの対決―ヴォルムス帝国議会―」では、エックとのライプツィヒ討論で、教皇の首位権を否定し、異端とされたフスの教説にも真理があると主張したことでルターは破門される。三大改革文書によりルターは、自らの教説を披歴したあと、ヴォルムス帝国議会で皇帝カールの審問において教説の取り消しを拒否する。その結果皇帝よりルターは帝国追放の処分を受けるが、ザクセン選帝侯フリードリヒ賢公によりヴァルトブルク城で保護される。

次の「第四章 第二次イタリア戦争」では、パヴィアの戦いで敗れたフランスが捕虜になりブルゴーニュの返還を約束して解放されるが、解放されるや、フランスはその約束の無効を宣言し反ハプスブルク同盟を結成した。その後のイタリア戦争の展開については「第二章 一五三五―四五年間のドイツ内・外情勢」で扱われるが、イタリア戦争について、その第二次の戦争を極めて詳細に跡付けている。第四章の冒頭に「皇帝選挙に敗れたフランス王フランソワ一世は、カールに戦争を挑み」（四四頁）とあるが、どうしてフランス王が戦うことになったのかの説明がなされておらず、読む者に唐突感を拭いきれない。そもそもどうしてこの戦争が始まり、なぜフランス王フランソワとその終生、戦わなければならなかったのかについての記述がほとんどない。カールの時代、宗教改革と並んでヨーロッパの国際政治に重大な意義をもたらしたのが、彼の治世を通して戦われたイタリア戦争のはずだが、この戦争の始まり、そしてその意義については触れられてない。第一章において、皇帝選挙でハプスブルク家とヴァロワ家のヨーロッパの覇権をめぐる対立という記述はあるものの、この第四章でこれにつ

いてもう少し踏み込んで展開してほしいと感じた。

「第五章 大航海時代、そして、新世界の植民地化」の章は、ヨーロッパの外部を扱った部分である。カールの時代はまさに大航海時代の始まりであった。コロンブスからマジェランの航海、そして征服者コルテスによるメキシコ征服、ピサロのペルー征服、ポトシ銀山の開発、そしてエンコミエンダ制の記述へと続く。カール五世の時代のスペインは新大陸を征服し、そこから入る銀が国庫を豊かにした。新大陸に触れたことは、著書の日配りの丁寧さと広さを示している。この時代からヨーロッパが強力に世界の一体化に向かうことを読者に示したことは本書の優れた点であろう。ただ気になったのはアメリカ大陸の先住民インディオを「土人」(六〇頁)と表記しているところである。現在、差別用語としてほとんど見られなくなったこの語を本書のような学術書で用いるのは違和感を禁じ得ない。

「第六章 宗教改革、広がる」「第七章 スイスの宗教改革」では、ドイツ・スイスの都市における宗教改革の導入を扱っている。ウィッテンベルク、ニュルンベルク、シュトラスブルク、メンミンゲン、チューリヒ、バーゼル、ベルン各都市の事例を詳細に述べている。短い「第八章 騎士戦争」に続く「第九章」第一二章 ドイツ農民戦争(一) (四)は、本書なかで評者を最もひきつける部分である。農民戦争に関する優れた論考を残された著者の熱い情熱が感じられる。まず農民戦争がおこるドイツの農村の社会的背景に触れ、それから農民たちを行動に駆り立てた「神の正義」思想。アルゴイ、ボーデン湖畔、バルトリンゲン、タウバータルなど十数の農民団をひとつひとつ丁寧にとりあげ、その蜂起と戦闘行動をできる限り具体的かつヴィヴィッドに跡付けている。どの農民団も結局敗北して解体しこの大農民運動は消滅する。この運動に同情的であったが、ミュンツァーの登場により急進化した農民たちを裏切ったルターに対しては、「おのれの宗教改革によって惹起された国民的解放運動を見放し、今後宗教改革の民衆的基盤を失うことになった。」(一五一頁)と評価する。この国

民的社会運動の失敗が「最近におけるドイツの暴挙の基底をなしたのではないか」(「序」頁)と著者は考える(ちなみにこの「最近におけるドイツ」とはナチスドイツのことを指すと思われる)。

「第一三章 プロテスタントイスマの成立」では、宗教改革の動向にまた戻る。一五二六年の第一次シュバイヤー帝国議会の決議は「宗教問題に関し、各自の良心に従って行動する権利を福音派に与え、以後、多くの新教派領邦および都市における宗教政策統行の基本原理となつていった。」事実上の福音派の承認を定めたこの決定は「歴史的意義はきわめて大きいといわねばならない。」そして、フランス王がイタリア戦争を再開したのと呼応して、オスマン＝トルコが遠征を始めハンガリーを制圧したのち一五二九年にウィーンを包囲したが、1か月後に撤退した。(ここでオスマン＝トルコのスルタンが「一五二〇年即位したスレイマン二世(大帝)」(二八七頁)とあるが、スレイマン一世の誤りと思われる)一五二九年、オスマンのウィーン包囲戦が始まる前に第二次シュバイヤー帝国議会が開かれ、二六年の第一次シュバイヤー帝国議会の決議の無効を宣言した皇帝の提案が承認された。これに対してザクセン選帝侯とヘッセン方伯など福音派諸侯が「われらは、唯一の創造者の前において、抗議し、その意を表明するものである」とする抗議文を読み上げて、このときからプロテスタントの呼称が生まれた。ザクセン選帝侯などの福音派諸侯は、この第二次シュバイヤー帝国議会の以前から、新しい福音派による教会制度を始めていた。それは教会を監督する教会巡察制の導入であった。この制度により領邦教会が形成されることになった。

「第一四章 マールブルク宗教討論」では、南北のプロテスタントの政治的合意を目指すヘッセン方伯の仲介によりルターとツヴィングリがマールブルクで討論を行ったが、聖餐をめぐる意見が折り合わず結局決裂した。「第五章 『アウクスブルク信仰告白』とシユマルカルデン同盟」では、一五三〇年カール五世はアウクスブルク帝国議会で宗教的混乱を終わらせる目的のために各人の「自分の考え、考慮、意見」を提出するように要請した。これに応じて、ルターの了承

のもとでメラnhitonが「アウクスブルク信仰告白」を作成する。しかし帝国議会がこの信仰告白を無効とする決議案をだしたので、プロテスタント派諸侯は議会から立ち去る。これら諸侯ならびに都市は、「アウクスブルク信仰告白」を承認するという条件のもとで結集し、同年一二月に、シュマルカルデン同盟を結成した。「第十六章 第二次カッペル戦争」では、シュマルカルデン同盟に合同する道を自ら断ち切ったツヴィングリは、ヴェネツィアやフランスとの同盟を模索するが成功しなかった。チューリヒは、第二次カッペル戦争でカトリック派の五州に敗れ、この戦いに従軍牧師として参加したツヴィングリが戦死した。

「第十七章 再洗礼派の運動」では、幼児洗礼を否定し成人後の自覚にもとづく洗礼を主張した再洗礼派の動向が述べられる。北スイスから始まり、南ドイツ、モラヴィア、ネーデルラントの民衆のあいだに広まったが、これらは徹底的に弾圧される。この再洗礼派の運動でとりわけ有名なのが北ドイツの中都市ミュンスターでおきた悲惨な出来事である。これについて「第十八章 ミュンスタールの千年王国」。一五三三年に説教師ロートマン指導のもとでミュンスターは福音主義が勝利したが、ネーデルラントから流入した再洗礼派が大きな勢力となり、市内のカトリックやルター派を追放し原始共産主義による共同体を樹立した。ポツケルソンが王に即位し独裁的政治を実施して反対勢力を処刑し、さらに一夫多妻制を導入したが、結局、一五三五年六月に司教軍により町は陥落した。

「第十九章 ハンザ同盟の凋落」では、リユーベックなどのハンザ都市における宗教改革の導入と、ハンザ同盟がデンマークやスウェーデンの北欧諸国のナシヨナリズムと結びついたオランダ商人のバルト海進出により衰退していくことが述べられている。「第二十章 地中海をめぐる戦い」では、目を北方から地中海に転じて、カール五世のチュニス占領について、「第二十一章 一五三五―一四五年間のドイツの内・外情勢」では、イギリスの宗教改革やフランドルのガンの反乱、カールとフランソワの間でクレピイの平和が結ばれたことなどが述べられている。「第二十二章 シュマルカルデン戦争から仮信条措置令（インテリウム）へ」

では、ついに皇帝側とシュマルカルデン同盟との間で戦争となった。これに勝利したカールは一五四八年に仮信条措置令を制定しドイツにおける信仰問題の解決をはかった。新旧双方の諸侯はこれを拒否したが、しかし都市にはこれが導入され、アウクスブルクなど南ドイツの都市ではツェンフト市政が廃止された。これによって「輝かしい自治独立を誇ったドイツ中世都市の姿が消滅した。」

「第二十三章 アウクスブルク宗教和議」では、北ドイツ諸侯による反皇帝同盟にカールは敗れ、ついに退位を決意する。カールに代わって弟である国王フェルディナントがアウクスブルクに帝国議会を招集し、帝国議会の決議が公表された。これが「支配者の宗教、その支配地に行われる」を定めたアウクスブルク和議である。この宗教平和によって、およそ四〇年続いていた宗教紛争ようやく終止符が打たれた。「第二十四章 対抗宗教改革―イエズス会―」第五章 カルヴァンの宗教改革」と続き、そして「第六章 皇帝カールの引退、その死」。カールは一五五五年退位演説をおこなって、翌年スペイン王位を息子フェリペに、皇帝位を弟フェルディナントに譲った。退位後のカールはスペイン中部のエステにあるヒエロニムス修道院で隠棲し、それから二年後に死去した。最後の「第二十七章 カール後のヨーロッパ」で、カール没後の一六世紀後半における各国の動向があげられる。ユグノー戦争のフランスの危機、オランダ独立戦争の勃発、フェリペ2世時代のスペイン、エリザベス一世のイギリス、三十年戦争前夜のドイツと著者の広い目配りが感じられる。

最後に評者がまだ学生のころ著者の大学での講義において、歴史学のスタイルは分析と叙述があると言われたことをいまだに記憶している。本書はまさに徹頭徹尾、叙述（ナラティブ）のスタイルをとっており、ヨーロッパ史の中でもとりわけ波乱の富んだカール五世の生きた時代を共時的に扱うことに成功しているといえよう。

近代歴史学の創始者レオポルト・フォン・ランケは、今日様々な点で批判されているが、しかし歴史学の本質となる彼の言葉“wie es eigentlich gewesen

1517を一六世紀のカール五世の時代において実践したのが書物というべきだろう。傘寿をすでに超え円熟にますます磨きを加えられた著者の健筆ぶりが感じられる。

(本学非常勤講師)